

砥 磨

SHIREI

愛媛県立医療技術大学広報誌



Contents

- | | |
|--------------|-----------------|
| 2 学長の挨拶 | 9 研究の芽 |
| 3 学部長の挨拶 | 10 global view |
| 4 学科長の挨拶 | 11 授業PR |
| 5 学生部長の挨拶 | 12 研究活動紹介 |
| 地域交流センター長の挨拶 | 14 地域交流センター活動紹介 |
| 図書館長の挨拶 | 15 図書館紹介 |
| 6 新任教員の紹介 | 16 インフォメーション |
| 7 大学紹介 | |
| 8 大学院紹介 | |

挨拶



愛媛県立医療技術大学は、医療の分野で社会に役立つことを目指す学生を教育し、地域における医療のリーダーとなる人材を社会に送り出すことを目的とする大学です。本学は、昭和63年に開学した愛媛県立医療技術短期大学を前身とし、平成16年から4年制大学、平成22年4月から公立大学法人愛媛県立医療技術大学となり、現在6年目を迎えます。法人化によって、大学の自己責任に基づいた裁量権が大きくなった結果、大学らしい自由度を発揮した展開が期待でき、活気あふれる大学を目指して様々な改革を進めています。

大学の第一使命である学生教育には既に定評があり、社会で活躍している卒業生は3,000名を超えております。平成27年3月の保健科学部および助産学専攻科の卒業生は、看護師100%、保健師100%、助産師100%、臨床検査技師100%という素晴らしい国家試験合格率を達成し、就職率100%で卒立って行きました。平成24年4月からは、学部の上に1年制の助産学専攻科を10名の定員で発足させ、平成26年度からは定員を15名に増員し、県内唯一の助産師養成課程をさらに充実させています。さらに平成25年4月からは学生定員を20名(看護学科15名、臨床検査学科5名)増やして、地域や国内の医療職不足に応えようとしています。また、平成26年4月からは待望の大学院(看護学専攻科5名、医療技術科学専攻3名)を開設し、一步進んだ先進医療教育や医療職のキャリアアップへの貢献を目指しています。

大学のもう一つの使命である研究に関しては、法人化によって大学の自由裁量権が大きくなったことを受けて、学内研究基盤の整備に力を注いで参りました。平成24年度からの3年計画で、約7,000万円をかけて教育・研究機器や設備の更新・充実をはかり、同時に、教員個々への基盤研究費や重点研究費の増額を行っております。こうした努力により、研究は徐々に活性化し、法人化前には毎年数件

程度であった文部科学省等の科学研究費採択件数は、平成25年度は16件、26年度は14件、27年度は19件と飛躍的に増加しております。さらに、教員による国際賞の受賞など、大きな成果をあげております。今後も、大学院が設置されたことにより、研究の進展は加速され、学外機関との連携を含めた活発な研究が展開できると期待されています。

本学の特色である地域交流センターは、大学全体の協力のもとに、多くの地域交流企画に加えて、専門職や一般人を対象とした教育活動、医療・介護・行政機関との連携・協力に尽力し、地域に貢献する大学としての使命を存分に果たしています。

このように本学は、法人化による自由化を契機に進化し、大きく発展しつつあります。今後とも各方面のご理解とご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

橋本 公二
学長

Koji Hashimoto





宮内
清子

Kiyoko Miyachi

保健科学部長
兼 助産学専攻科長
保健医療研究科長

本年4月、愛媛県立医療技術大学は、開学から12年目を迎えました。400余名の若い学生たちでキャンパスは常に活気に満ち満ちており、改めて多くの関係者の皆さまのご協力の賜物と感謝しております。

この間、本学では、学部教育を充実させることはもとより、学部の定員増、助産学専攻科の開設、大学院「保健医療学研究科」の開設と、一歩一歩、高等教育機関としての教育研究力を高める努力をしてまいりました。そのなかから、特筆すべきいくつかのことと紹介したいと思います。

学部教育の充実

保健医療福祉をめぐる社会の変化や医療の高度化を受けて、平成24年度から看護職の教育年限が改正されました。本学においても、看護学科では、社会のニーズに対応できる専門職教育を目指してカリキュラム改正を行い、保健師教育の選択制を導入するとともに、看護師の資格のみを取得する学生の教育内容の充実を図りました。今年度は、保健師を目指す30名の学生たちが、公衆衛生看護学の科目履修とともに、地元低部町の全面的な協力により臨地実習を修了いたしました。

また、看護師を目指す学生たちは、それぞれの関心分野の科目をより深く学ぶため選択科目を履修しており、各学生が自身の将来像を描きながら学べるようカリキュラムを構成しています。

一方、臨床検査学科においても、医療分野における臨床検査

分野の業務拡大や臨床現場における役割の変化を受けて、基礎的な各種検査法に加えて、最新の検査法や検査技術の診断法等を強化するとともに、人を対象とする業務が拡大していることに対応して、「患者・家族の心理」を学ぶ科目や「チーム医療」についての学修、2年生から4年生にかけての3段階にわたる臨地実習を組むなど、時代の要請に応えられるよう工夫を凝らしています。

助産学専攻科の教育体制の強化

平成24年4月、数年に亘って準備を進めてきた助産学専攻科を開設し、看護基礎教育の上に1年間の上乗せ教育をスタートしました。県内唯一の助産師教育機関としての地域の期待も大きく、平成27年度からは定員15名を教育できる体制を整え、人間性・専門性を兼ね備えた助産師の育成に力を注いでいます。近年の少子化の影響を受けて、妊娠・出産・育児に関わる臨地実習施設の安定確保は大きな課題であり、ご協力いただく医療機関、助産施設に感謝しつつ教育を展開しています。

大学院「保健医療学研究科」の動向

26年4月、大学院「保健医療学研究科」を開設し、順調に2年目を迎えるました。研究科の基本理念として「地域の保健医療を支える」を謳っており、「保健医療の分野に関してより高度で専門的な学術理論や実践能力を修得し、総合的な判断能力・指導力・教育力をもって高度専門職業人として力を発揮できる人材の育成」を目的に、社会人が在職のまま学べるよう昼夜開講制や長期履修制度も設けています。定員は8名ですが、1回生10名、2回生8名を受け入れ、今年度は、初めての修士の学位を授与することができそうです。学生が切磋琢磨しつつ学ぶ姿に励まされ、担当教員たちは、夜間や休日の開講に自身の計画を合わせながら教育に当たっています。

「10周年記念式典」の開催

10周年を迎えて、その記念すべき年を後々に刻み、お力添えをいただいた多くの方々とともに祝いたいとの趣旨のもと、平成26年9月、「開学10周年記念式典」と「記念祝賀会」を開催しました。設置者である愛媛県知事をはじめ歴代の学長・学部長、日ごろ臨地実習などでご指導いただいている県内の医療機関の方々、教育機関の先生方、本学の後援会・同窓会会长、学生自治会代表、本学教員など約100名が一堂に会し、来賓の方々のお祝辞や思い出のスライド鑑賞などを通じて本学これまでの歩みに思いを馳せました。また、記念講演では、島根県立大学学長本田雄一先生から「地域に必要とされる大学であるために」と題して御講演をいただきました。県立大学の使命や存在理由を常に意識し、中長期的目標を明確にして大学改革に努めることの必要性が語られ、本学においても次の10年に向かって創意ある大学づくりに取り組まなければならないと、教職員一同、思いを新たにしました。

以上、本学の教育の一端を紹介しましたが、学部・専攻科・大学院の教育をさらに充実させるため、教員一同努力して参りますので、皆様のお力添えをお願いいたします。

挨 拶

中西 純子

Jyunko Nakanishi

看護学科長



今年3月末、看護学科にとってたいへん嬉しいニュースがありました。看護師・保健師・助産師の国家試験すべてに100%合格というニュースです。3資格とも同一年度に100%合格というのはたいへん難しいことで、本学でも大学開設後はこれが2度目です。20年前にはわずか全国に11校しかなかった看護系大学が、平成26年度時点では228大学あります。この数は全国の大学数の30%を占めています。そのなかで、昨年度看護師国家試験に100%合格を果たした大学は26大学しかありませんでした。ちなみに全国の平均合格率は99.5%ですから試験の難易度自体はそれほど高くはないのですが、受験者全員が揃って合格し、学校として100%を達成するということが如何に難しいことか、この数字を見てご理解いただけるのではないかと思います。しかも、3資格とも100%合格でしたから、学内には“祝!100%合格!”の文字が誇らしく躍りました。後輩たちもこれに續けと、今、頑張ってくれています。

また、昨年本学は大学院を開設し、卒業生たちが母校で大学院に進学する道を拓きました。大学の卒業生もはや8期生を出しておらず、卒業後のキャリアアップの選択肢のひとつに是非とも考えて欲しいと願っています。現在は、短期大学・大学の卒業生が5名、大学院研究科看護学専攻で学んでいます。大学院を修了した卒業生たちがいざれば本学の教育を担うようになり、バトンリレーができるようになることを期待しています。

升野 博志

Hiroshi Masuno

臨床検査学科長



臨床検査学科の学生数は一学年25名(平成24年度までは20名)と少数ですが、その分、教員は一人一人の学生を理解して4年間の教育にあたることができます。臨床検査技師が活躍する職場は病院の検査室だけにとどまらず、検診・検査センターでの仕事、官公庁での保健衛生に関する仕事など多岐にわたっています。本学には毎年、全国各地から445～548名(愛媛県は26～47名)の募集案内が届きます。昨年度の卒業生21名は全員が臨床検査技師国家試験に合格して臨床検査技師として就職っていました。中でも愛媛県出身者は全員が県内の病院や検査センターに就職することができました。本年度も全国各地から募集案内が届き始めていますが、臨床検査技師として就職するために4年生20名全員が勉学に励んでいます。

また、本学は平成26年度に大学院(医療技術科学専攻の定員は3名)を開設しました。医療技術科学専攻の1期生は3名の既卒者が入学し、卓越した実践能力・リーダーシップ能力・研究能力を身に付けるべく日夜励んでいます。本年度は2名が既卒者でしたが、1名は本学の新卒者が入学しました。来年度からも引き続き大学在学生が大学院を目指してくれることを願っております。



学生部長

脇坂 浩之

Hiroyuki Wakisaka

本学には、医療の専門職を目指す保健科学部と助産学専攻科、さらに医療専門職がより高度の専門性を目指す保健医学研究科（大学院）があり、それぞれの場で『専門職になる』『専門性を高める』という夢の実現のために、学生の皆さんが学生生活を送っています。その学生生活全般をサポートするために活動しているのが、私を含め約10名の教職員より構成される学生委員会です。学生委員会では、全教職員と協力して、また学外のサポートもいただきながら、より充実した学生生活のためのさまざまな支援を行っています。その支援内容は多岐に渡りますが、大別すると、学生生活そのものの支援とサークル活動や自治会活動などの課外活動に対する支援があります。以下に、学生委員会の主な支援活動についてご紹介いたします。

1.オリエンテーション 新入生を中心に、全学生を対象としたオリエンテーションを実施し、学生生活関連の情報提供等の支援を行っています。

2.一般健康診断・内科検診・保健室管理・感染管理 学生の健康維持のために、全学生を対象として健診等を実施するほか、保健室の維持管理やインフルエンザやノロウイルス等の感染予防啓発活動を行っています。さらに、実習時の安全対策として実習時感染防止マニュアルの作成も行っています。

3.各種セミナー 学生生活に関連するさまざまなセミナーを開催しています。交通安全講習会、犯罪被害防止教室、金銭感覚啓発セミナー、デートDV防止啓発講座、就職セミナー等を開催し、学生生活に関連したさまざまなトラブルの防止や就職支援活動を行っています。

4.学生相談 学生は、さまざまな悩みやトラブルをもちやすい多感な時期を本学で過ごすことになります。学生委員会では、それらの悩みに対して、積極的に相談に応じる体制をとっています。クラス顧問や学内相談員をはじめ、学外から心理カウンセラーの先生にも月2回来学していただいている。

5.自治会活動支援 自治会運営への助言、自治会主催イベントへの参加・応援（学長杯争奪球技大会、医技大クリーンナップ大作戦）、学生祭、サークル活動への支援等を行っています。

6.後援会 保護者の方々との情報共有や連携を通して、学生の皆さんに、より充実した学生生活を送れるよう支援を進めています。後援会総会や役員会への出席、後援会向けのキャンパスツアーや教員との交流会等も行っています。また、「キャンパスライフ」（学生委員会発行：年2回）を通じて、保護者の方々に大学の状況や取り組み、学生の状況等についてお知らせをしています。

7.その他 福利厚生の充実、奨学金申請、キャンパスの安全と美化の推進等に取り組んでいます。

以上、簡単ですが学生委員会の活動をご紹介いたしました。学生委員会では、学生の皆さんによりよい学びの場が提供できるよう、今後も活動の充実を図っていきたいと考えています。



地域交流センター長

豊田 ゆかり

Yukari Toyota

～地域に開かれた大学を目指している活動拠点としての地域交流センター～

地域の方々や高校生の皆様は、本学の地域交流センターをご存知でしょうか？

地域交流センターは、平成16年4月大学の開学と同時に設置され、県民すべての保健・医療・福祉の増進に寄与することを目的に活動し、本年で12年目を迎えるました。地域交流センターはこの目的実現にむけ、①人材育成機能、②調査研究機能、③相談支援機能、④情報発信機能の4つの機能をもち、本学の施設、設備と教職員、学生ボランティア等の人材を活用した事業を展開しています。

これらの活動の一部を紹介いたします。

①人材育成機能では、本学の教員の教育研究の成果を専門職や地域の方々、高校生に還元しています。たとえば、看護師・臨床検査技師等が働く保健医療福祉教育機関等からの依頼を受けて、講演や研修活動を実施しています。また地域の方々、高校生、NPO団体へは健康教育、高校生への生物に関するサイエンス講座等の講演・研修活動も実施しています。この活動の中に、愛媛で開催されて4年目を迎える松山市城山公園で開かれる、がん制圧への願いと絆を深め合うリレーフォーライフinえひめセンター活動があります。この活動に第一回目から本学教職員、学生は参加しています。学生ボランティアは、本部実行委員、学内実行委員として、活動前から積極的に本部との打ち合わせに参加し活動しています。今では本学学生ボランティアは、リレーフォーライフinえひめには欠かせない重要な存在として位置付いています。その他子供から高齢者の催し物、障害者の運動会等幅広く各種団体からボランティア依頼が毎年増加傾向にあり、ボランティア活動に参加する学生も増えています。学生達も地域の様々な人達と交流することで、子育て事情の理解、高齢者、障害者の気持ちや関わる方を体験し、実社会で自分の経験を培い、視野の広い人間として育つ機会にもなっています。

②調査研究機能としては、保健医療・関係機関との共同研究を5年間平均で約20件以上実施しその数は毎年増えています。
③相談支援機能としては、保健医療福祉教育機関、関係団体、地域の方々の相談に対し、面談・電話・メール等での対応を実施し、毎年増加しています。
④情報発信機能としては、大学が発行する大学案内、砥礪、報告書を通じ地域交流センターの活動や研究成果の報告を行っています。

これらの活動を通じ、地域の皆様や専門職の方々に活用される地域交流センターを目指しています。今後も行政、学校、NPO法人、各種団体等の関係機関との連携を図り、学生達とともに県民の皆様に活用していただけるよう活動を続けていきたいと考えています。



図書館長

佐田 榮司

Eiji Sada

本学では看護師、保健師、助産師、臨床検査技師などの医療職を養成していますが、医療職として活躍するためには、専門分野や人間性を高めるための学習が必要です。そのため、図書館では学生の学習支援のための様々な取り組みを行っています。

①図書の充実：図書館の基本機能として蔵書の充実があります。従来教員に学生教育用図書を推薦してもらう教員選書を行ってきましたが、それに加え、一昨年から学生によるブックハンティング、昨年から図書リクエストボックス設置など、学生自身が必要とする書籍・資料の購入を行なうようにしました。

②学習環境の整備：近年図書館に求められる重要な役割として、学生が学習する場の提供があります。当館でも、昨年度から平日午後9時までの開館延長、土曜日開館を行い、また図書館に隣接する教室の開放業務等を通じて、学生の学習環境整備に努めています。

③情報社会への対応：学術情報の電子化に対応し、学術論文に関するデータベースの積極的な充実を行い、また、新たに電子ジャーナル7種の購入を開始しました。さらに、図書館内からインターネットへアクセス出来るようにフリーWi-Fi環境を整備いたしました。

④地域貢献：地域・社会に開かれた図書館を目指し、本学の卒業生を含む地域の医療関係者や一般の学外者に対して、利用時間の延長、文献検索等に関するサービスの拡充を行いました。

これらの取り組みの結果、学生の図書離れ・図書館離れが言われる昨今ですが、平成26年度の実績で1日平均約160名の入館者があり、学生一人あたり年平均約32冊（全国大学図書館平均約10冊）の貸し出しが行われました。

さらに、今年度から新たに学生図書館サポーター制度を導入いたしました。学生とも協働し、学びの場、地域に開かれた図書館としてさらなる充実を目指します。

新任教員 紹介



看護学科

母性・小児看護学講座 准教授

小嶋 理恵子

Rieko kojima

私は、総合病院で助産師として働いた後、大学・修士課程へと進学しました。修士課程修了後は、研修生として3年間、医療政策の調査グループに所属し、スエーデンの男性助産師、イギリスのダイレクトエントリーで教育を受けた日本人やイギリス人の助産師へのインタビュー、バースセンター、ハイリスク病院の視察を行う機会を得ました。その体験を通して、その国のジェンダー観や、助産師基礎教育が助産師としてのアイデンティティ形成に影響を与えることを実感しました。

その後、故郷の宮崎で大学の教員としてスタートし、今年4月に本学に着任しました。愛媛での生活も3ヶ月目に入り、領域の先生方のサポートもあり生活が少しずつ落ち着いてきました。また、臨地実習を目前に控えた学生の助産師になりたいというエネルギーも日々感じています。

今後も、臨床の方々と協働して実習教育を行っていきたいと思います。



臨床検査学科

生体情報学講座 准教授

山岡 源治

Genji Yamaoka

私は前任地の香川大学医学部附属病院で臨床検査技師として、主に血液検査業務を担当していました。造血器腫瘍における血液形態検査およびフローサイトメトリーによる免疫学的検査を専門として、検査の面から血液疾患等の診断や治療のモニタリングに関わってきました。また、香川県や四国の臨床検査技師活動の一環として、血液検査研究班の研修会や症例検討のための鏡検会等を開催し、地域における臨床検査技師のスキルアップと施設の枠を超えた横の連携強化を図ってきました。

今まで教育現場の経験がなく、戸惑うことが多いですが、未来を担う臨床検査技師育成のために、臨床現場での経験を活かして、単なる知識や技術の伝達ではなく、自分で考えることを重視した教育を目指して、微力ながら精進していきたいと思います。



看護学科

地域・精神看護学講座 特定教員

坂元 勇太

Yuta Sakamoto

私は、この大学に就職する前は香川大学附属病院の精神科病棟で働いてきました。精神看護には学生時代から興味をもっており、特に境界型人格障害患者さんに関心をもっています。

現在は、教員生活の傍ら、この大学の大学院2期生としてもお世話になっています。

教員という仕事は初めてで不安もありますが、少しでも学生に精神看護の楽しさを伝えられるような指導が行えるように日々精進していきたいと思います。

大学 紹介

成人・老年看護学講座紹介

私たちの講座は成人看護学6名と老年看護学3名の教員、計9名で構成されています。成人看護学は働き盛りの年齢層の方たちの身体・心理・社会的特徴の理解と、疾患に罹患した時の急性期・慢性期・終末期の看護について教授しています。非常に幅広い学習内容を扱う領域のため、一方的な講義で知識や方法を教授するのではなく、これまでに学修してきた知識の使い方が学修できるように思考過程の訓練に力を入れています。そのため、急性期では手術後の場面等を想定したシミュレーション教育、慢性期では事例の課題を少人数のチーム単位で探求していくTBL(チーム基盤型学習)に取り組んでいます。

老年看護学では高齢者の心と体の特徴の理解を基盤に、高齢者の生活機能に目を向け、成人期の看護とは異なる視点が理解できるようにしています。対象論ではポジティブな高齢者像をイメージでき高齢者自身の力に目が向けられるように、方法論では学生の「考える力」と「人に寄り添う姿勢」を引き出す授業を心掛けています。実習では多様な高齢者看護の場(病院、介護老人保健施設やグループホーム、デイサービス)をフィールドとし、変化が大きい高齢者医療の現場にも柔軟な対応ができるように努めています。研究面では、幅広い健康問題のなかから、高齢者の睡眠、看取り、フットケア、食育、がん患者の意思決定・ゆらぎ、高次脳機能障害者の退院移行支援などのテーマに取り組んでいます。臨床実践力・機動力の高さを特徴とする本講座は、介護職の吸引・経管栄養研修など、社会貢献にも先導を切って貢献しています。

基礎検査学講座

米持教授、玉内教授、野島准教授、北尾准教授、大崎准教授、佐川助教、岡村助教

基礎検査学講座は、生理機能・生体防御・安全管理学分門より構成されています。学部教育において、生理機能部門では「人体の構造・機能」、「医用物理学」、「医用工学」、「生理機能検査学」を、生体防御部門では「臨床微生物学」「臨床免疫学」「輸血・移植検査学」そして、安全管理学部門では「臨床検査学総論」などについて専門科目を担当しています。

研究領域は、学問のグローバル化に伴い領域の垣根を超えてスタッフ間で共同研究が推進されています。「心筋細胞機能」「脳波」「薬剤耐性」「尿細管上皮細胞」「血液型」「アレルギー」等が、研究領域のキーワードとして上げられ、臨床検査学科の発展を通じて大学の更なる発展や社会に貢献できればとがんばっています。

～女性の健康・妊娠・出産・子供の育ちと家族支援の看護を教授する講座～

母性・小児看護学講座は、小児看護学分野3名、母性看護学分野・助産学分野の7名、の3分野、計10名の教員で構成しています。小児看護学分野では、成長・発達する子供の健康状態や病気の状況に応じた看護、さらに家族を含めた支援を中心とした内容です。小児看護学分野の教員3名は保健師・看護師として保健所・病院・保育所で培った経験を活かし、子供と家族の看護を教授しています。母性看護学分野は、母性看護学・助産学の2分野の構成です。母性看護学では、女性の健康・妊娠・出産に関係する看護を教授しています。助産学分野は、愛媛県内唯一の助産師国家試験受験資格が得られる助産学専攻科の教育を行っています。助産学専攻科は、大学卒業かつ看護師免許(看護師国家試験受験資格)を有していることが入学の条件となります。入学後は、助産師の活動に関する内容を1年間で学習します。病院・助産所・国際協力等助産師としてさまざまな経験を有した教員7名が学習をサポートし、看護の基礎分野や母性看護学で学んだ内容を基に、女性の健康・妊娠・出産に関連する助産師の活動を中心に教授しています。助産学においては、学内講義・演習後県内4か所の病院での助産実習・助産所実習・新生児訪問等で実践を通じ助産師としての学習を深めています。

また研究において小児看護学分野では、医療的ケアを必要とする子供の在宅ケアに関すること、育児支援に関すること、病気の子供のきょうだいを含む家族の看護に取り組んでいます。母性看護学分野・助産看護学分野では、思春期健康教育・助産師としての技術力向上、国際貢献、助産学教育、母性意識の形成、夫婦関係支援等に取り組んでいます。少子化の時代、ますます子供と女性、家族の看護が重要となる中で、これらの研究成果は看護専門職の継続教育や高校生へのメディカルトーク、小中学生への思春期教育等社会貢献にも発揮されています。



大学院 紹介

看護学専攻 地域健康生活支援分野

地域健康生活支援分野は、地域看護学(担当:野村美千江、田中美延里)と精神看護学(担当:越智百枝)があります。

地域看護学では、集団・組織・地域の顕在的・潜在的健康課題をアセスメントし、解決・改善する支援方法を探求します。また、健康危機管理や人材育成について学び、地域看護実践リーダーに求められる役割と課題を探求します。野村は、地域で暮らす高齢者の家族支援や地域ケアプログラムの評価・開発について、田中は、保健師のキャリア発達支援、継続教育について研究指導を行っています。現在3名の修士生を受け入れ、うち1名は研究に着手、2名は長期履修制度を活用し3-4年かけてゆっくりと学んでいます。

精神看護学では、人は自身を最もよく知り、セルフケアできる存在であること、また、病気をきっかけに、より高いレベルへの成長・発達を遂げるという視点から対象を理解し、対象及びその家族が病気や障害を持ちながら生活するのみでなく、人として成長・発達するための効果的な支援を探求します。越智は、アルコール依存症等の精神疾患を持つ患者及び家族の対象理解や成長発達を促すあるいは回復を促す看護について研究指導を行います。平成27年度に2名の修士生を受入れ、1名は今年度中に研究計画書を作成することを目標に、1名は長期履修制度を活用し2年かけて1年生の科目を履修することを目標に頑張っています。

日頃の活動を振り返り、課題を明確にし、解決するための学術理論や実践能力、研究能力を修得したいと思われる方を心からお待ちしています。

医療技術科学専攻 生体機能分野

生体機能分野には現在9名の教員が所属しています。各教員の研究分野は様々で研究テーマは多岐にわたっていますが、主に以下のようなことについて研究を行っています。1)生体防御学に関連しては、「遺伝子改变動物等を用いたヒト免疫疾患モデルの構築とその発症機序についての研究」2)感染制御学に関連しては、「病院内感染および地域における食中毒等の感染症を防止するための対策、また病院内感染の起炎菌の特性・疫学的調査に関する研究」3)生体機能検査学に関連しては、「基礎と臨床の両面から循環器疾患を中心とした生活習慣病に関する研究」また「環境ホルモンの不整脈に対する影響に関する研究」4)病態情報解析学に関連しては、「自己免疫疾患、膠原病・アレルギー疾患の病態、病因に関する研究」また「頭頸部がんを中心に、がんの病態、診断、病因に関する研究」また「骨代謝などの代謝性疾患を中心に、遺伝子発現解析や生化学的分析による研究」5)環境保健学に関連しては、「環境中の汚染物質の濃度を測定するための定量方法に関する研究」また「成・老年期の健康増進及び非感染性疾患(NCDs)予防の社会医学的アプローチに関する研究」などについて行っています。



研究の芽

看護学専攻看護教育分野



教授 野本百合子



院生 濱田亜希



院生 菊地小百合



院生 山本千恵美

野本:「今日は、院生の皆さんに集まつていただきました。よろしくお願いします。早速ですが、大学院に進学しようと思ったきっかけや目的は何ですか。山本さんからお願ひします。」

山本:「私自身は、臨床看護については経験は長くて強みかなと思っています。現在は専門学校で教諭をしていますが、看護学校を出てから非常に長い期間臨床にいたので、今、フレッシュな学生にどのように看護を伝えていったらいいのかなというあたりで、自分の柱となる知識とか理論が欲しかったのです。私は看護専門学校を卒業しているので、大学で学問を専門的に学ぶという教育を受けた事が無いため、こちらの大学に大学院が出来るということで一気に学びたいという気持ちが膨らんで受験をしました。目的は、臨床の中で看護師がどのように育っていくのかなというあたりを明らかにしたかったし、働き続けていくのに辞めていくという現場の状況がありましたので、なるべく辞めないで頑張って働いてもらえる看護師を育てたいなという気持ちが、一部研究課題にも繋がっているかなと思います。」

野本:「山本さんは結構経験があるのですが、濱田さんはあまり経験が無い中での大学院進学ですが、何かきっかけがありますか。」

濱田:「私自身は、学部の時からいつか自分は大学院に進学したいと思うんだろうと漠然と考えていました。それは現場に出た時に小さな疑問がどんどん膨れ上がり、なんでなんだろう、どうしてこうなんだろうという疑問を解決できないまま日々が過ぎていくという現場にいて、自分自身がその疑問を解決できなくて、それが腹立しさというか、それを解決できないと自分的にも現場で先輩として後輩に伝えていったりとか、そういうことに支障が出来来かねないくらい自分の中ではよくわからない感情が渦巻いていて、このどうにもならない気持ちを大学院に進学する事で知識を得て、研究の中で自分の疑問に思っている課題に見つめ合うことが出来れば、次の臨床で自分が上の立場になった時でも役に立つのではないかと思いました。早いかなという気持ちもありましたけど、今が自分にとってのタイミングじゃないかなというのもあって進学を決意しました。」

野本:「菊地さんも長く看護学校の先生をされているんですけど、何かきっかけはありますか。」

菊地:「私は二つきっかけがあって、先ほど山本さんが言われたように何か核となるものが無くて、なんかこれでいいのかなという中で教育に十数年携わってきて、もう一回勉強し直さないといけないなと思ったのが一つと。学校の中でやってる研究に携わった時に新たに発見した事があって、研究って面白いんだなと思い、もう

少し研究手法についても勉強してみたいなというのがあって大学院に行きたいと思いました。私の研究テーマは、看護技術演習の中で自分がしている研究活動っていうものの中に何かがあると思って、そこを明らかにしたいと思い、そういう研究に携わっています。」

野本:「山本さんは、どんな研究をしようという方向でしょうか。」

山本:「私の研究は、学生が学ぶ中で、講義、演習、実習とあるんですけど、学生が躊躇するのが実習ではないかなと日頃から感じています。文献の中にもそういう記述がありますし、実習を如何に乗り越えるというか、如何に学生が学習効果を上げるような実習が出来るかが大切なことなので、実習を学び多いものとするために、教員としてはどのような関わりが出来るのか明らかにしたいと考えています。」

野本:「濱田さんは、まだ研究計画書が進んでいませんが、今はどんなことに興味がありますか。」

濱田:「やはり私は経験が少ない中で疑問を解決したいという思いで来ているので、新人から三年目くらいまでの看護師の役に立って、また自分自身が現場に戻った時に活用できる研究にしたいなと思っています。」

野本:「最後に、今後の抱負とこれから進学を考えている看護職の皆さんにメッセージをお願いします。」

山本:「学びたいなと思う時が、その人にとってのタイミングだと思います。日頃から学びたいなと思う気持ちを大切にして一步踏み出す、そうすると助けてくださるとか学べる環境が待っているのかなと思いますので、仕事をしながらでも学生オンラインになってしまって、その人の出来る形で学ぶことが出来たらなど考えます。」

野本:「濱田さん、どうですか。」

濱田:「現場にいると、大学院進学ということに対してマイナスのイメージというか、あまり理解をしてもらえないこともあると思うんですけど、私自身も結構支えてくださる先輩方と逆にあまりプラスには取ってもらえない先輩もいましたけど、自分のやりたい事が出来るっていうので、チャレンジすることっていうのは、私自身はすごくいい決断ができたなと思っていますので、周りの目もありますけど、やりたい事に向かって突き進んで行けたらいいなと思っています。」

野本:「菊地さんは、結構遠くから通われて一年間大変だったと思うんですけど、どうでしょうか。」

菊地:「私も学びたいと思った時がチャンスじゃないかなと思っています。私の場合、職場が理解してくれて、少し早めに出させてくれて、気をつけてね。と言ってくれているので、頑張って職場の皆さんに勉強した事を伝えられたらいいなと思っています。大学に来て一年を振り返って思うのは、勉強方法がすごくわかってきた、身についてきたということです。特に何かが出来るようになりますたというのはまだ言えないんですけど、大学院に行きたいなと思っている方にはチャレンジしていただきたいし、大学院は充実していて楽しく、生活も豊かなになるかなと思います。」

野本:「皆さん、ありがとうございました。」



Global view

海外研修(学会)報告

途上国で『共生』を考える

母性・小児看護学講座 助教 森 久美子

途上国を視野に助産師に

世界の人口は73億人で、その内の8割、60億人は途上国で生活しています。私たちは自分たちが生活している先進国がスタンダードだと思いがちですが、世界のわずか2割の少数派です。26年前に中学教師だった私はザンビア共和国のセカンダリースクールで数学を教える機会を得ました。教育は子どもを幸せにすると信じて赴任しましたが、生徒はマラリアなどの病気になると治療ができないため学校を去るしかなく、教育の機会が簡単に奪われることを目の当たりにしました。「教育を受けること」は「健康であること」が前提であることに気づき、とても悔しい思いをしました。その後、中央アフリカ共和国に診療所を建て、エイズ患者のために長年活動されている徳永端子先生と出逢ったり、クラスに健康でないために教育を受けられない生徒が年々増えたり、いろいろ考えることがあり教師を辞めて助産師になりました。

国際共生看護を専門に

臨床5年を経て、徳永先生から『国際共生看護』を学ぶために大学院に進学しました。中央アフリカ共和国で小学生、母親、教員に対して「小学生の下痢に対する予防的保健行動」についてのインタビュー調査をしました。3回目の訪問だったので現地の事情を知っていたにも関わらず予想外の調査結果も出て、異文化社会で研究することの難しさを痛感しました。しかし、調査目的からはずれた結果の中には日本が失ってしまった親から子へと受け継いでいく健康に関する生活の知恵が多くあり、医療者として学ぶべきことがたくさんありました。先進国と途上国は、互いに与える事があり、与えられる事がある。これがアフリカで活動を続けている先生が、『国際』と『看護』の間に『共生』を入れた理由だと思います。

今後の目標

縁あって途上国で母子保健に関する研究が始まられるようになりました。現地の人たちと話し合いをする中で文化の違いから行き違うこともあります、共に進めていくことが成果を生み出すと考えています。

最後に

中央アフリカ共和国は2年間の内戦で多くの人や物を失いました。インタビューを受けてくれた子どもたちの写真を見ると胸が痛くなります。「教育を受けること」と「健康であること」を保障するのは「平和」であることは決して忘れてはならないことだと思っています。



授業PR

急性期看護方法論 ～救命処置～

看護学科 助教 小西 円

急性期看護方法論の授業で実施している『救命処置』について紹介します。『救命処置』には、一次救命処置と二次救命処置があります。一次救命処置とは、心停止や呼吸停止を起こした人を救命するために、その場に居合わせた人が特殊な器具や医薬品を用いずに行われる蘇生法です。一方、二次救命処置とは、特殊な器具や薬品を用いて十分に訓練を受けた医療者が医師の指導のもと行われる蘇生法です。蘇生法は初期対応によって救命率や社会復帰率が左右されるといわれております、人の命や生活に携わる看護師にとっても、欠かせない知識や技術のひとつです。

そのため、この授業では一次救命処置・二次救命処置とも講義や実技演習等で学習し、人の命や生活を救う重要性を伝え心肺蘇生法が行えるように授業設計をしています。

講義では、実際に一次救命処置で救命した側、救命された側両方の語りをDVD視聴し、一次救命処置の大切さを感じてもらえるよう工夫しています。また、実技演習では、場面を設定し、モデル人形を利用して心肺蘇生法を実際に体験していきます。実際の救命処置現場では常に緊張感を持ち実施されるため、演習でも限られた時間枠で状況を設定し、人工呼吸・胸骨圧迫・実習用AEDの使用・気管挿管の準備まで体験

することで臨場感あふれる内容にしています。リアリティのある中で、学生は切迫感や焦燥感が高まり右往左往していくますが、それも学びのひとつであると考えています。

学生からは「蘇生につなげるためには一つ一つの処置が大切になる」「限られた時間で行うとパニック状態になるため、もっと練習したい」という声が聽かれました。継続して練習を重ねることで、かけがえのない命を救えるようになりますことを期待しています。



遺伝子検査学実習

臨床検査学科 助教 伊藤 晃

遺伝子検査は遺伝病や感染症、がんの診断だけでなく、近年、研究が進んでいる一人ひとりにあった薬の選択をする治療（個別化医療）のためにも利用され、多くの病院の検査室等で実施されています。本学の遺伝子検査学実習においては講義で学んだ知識をもとに基礎的な技術を身につけられるような内容で構成しています。染色体検査法では染色体標本の作成法から分析法を、遺伝子検査法では核酸を取り扱う際の基本的事項や注意点、核酸抽出法、DNAクローニング、サザンプロット法、PCR(Polymerase Chain Reaction)法によるDNA多型解析等を行って、その原理や特徴の理解を深められるようにしています。特にPCR法は遺伝子検査において繁用される技術のため、この方法を応用した遺伝子解析技術の内容を多く取り入れています。

実際行っている実習の例として、『PCR法によるABO式血液型の遺伝子型解析』について紹介します。ABO式血液型の遺伝子は僅かなDNA配列の違いにより血液型が異なることが知られています。これをPCR法により判定する方法を2つの方法で行っています。

実験1. PCR-RFLP(restriction fragment length polymorphism)法によるABO式血液型の遺伝子型解析

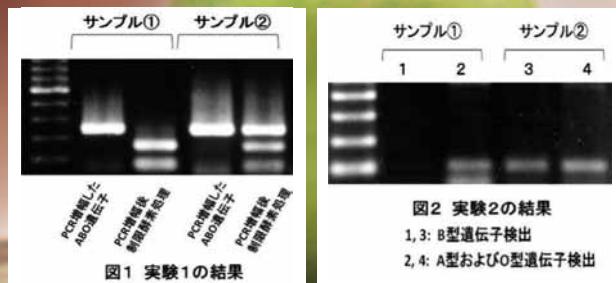
サンプルDNAのABO遺伝子を含む領域をPCR法で増幅した後、制限酵素という特定の部位に反応する試薬で処理すると、O型遺伝子は特定の部位で2つに切断されますが、A型およびB型遺伝子はその部位を持たないため切断されず、右図のように遺伝子型を判定することができます。図1では、サンプル①はOO、サンプル②はAOまたはBOと判定することができます。

実験2. アレル特異的PCR法によるABO式血液型の遺伝子型解析

サンプルDNAをB型遺伝子またはA型およびO型遺伝子に特異的なPCR法を行うことで、それぞれの遺伝子に対応した部分の増幅産物の有無により各遺伝子型が判定されます。図2のサンプル①はA型またはO型遺伝子があり、サンプル②はB型遺伝子とA型またはO型遺伝子のいずれかがあると判定されます。

実習では実験1と実験2を合わせて判定をし、結果の信頼性の確認も行います。

遺伝子検査で扱うサンプルは微量な試料を扱うことが多く、注意力や集中力のほか、丁寧な操作が必要とされます。実習を通して、これらのこととも修得し、更に倫理的な配慮についても学び、新しい遺伝子検査法への応用力を身につけます。



皮膚の潤いを保つための看護方法の開発

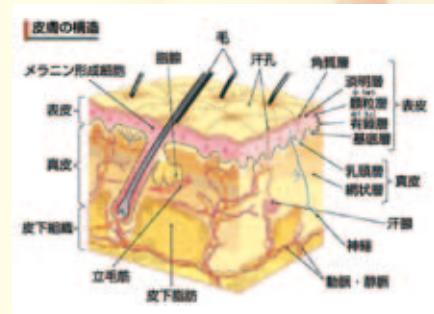
看護学科 講師 岡田ルリ子

冬は、大気の乾燥等で湿度が低下しドライスキンという病態を引き起こします。これは、人体の最外層に位置する“角質層”という $20\text{ }\mu\text{m}$ 以下の薄い膜に含まれている水分量が減少した状態を言います。この角質層は、外界からの物理・化学的、生物学的侵襲を防ぎ、体内の水分・血漿等の体外への漏出を防ぐ“バリア”としての重要な機能を有しています。そのため、この角質層の水分が減少してドライスキンになると、皮膚が乾燥して亀裂し、皮膚のバリア機能が低下して、アレルギーや感染症の発生、痒みの誘発など、多彩な病態を引き起こします。

このドライスキンに関するこれまでの研究は、皮膚からの水分の蒸発予防のための保湿剤や入浴剤の検証研究が主流でした。そこで私は、保湿剤等の外用薬に因らない、自然かつ簡便な方法での角層への水分補給のためのアプローチを模索してきました。現在のところ、片手を10分間 42°C の湯につけるだけで、反対側の腕の角層水分量が1時間以上にわたって増加する現象を確かめています。つまり、片手を湯につけるだけで全身の皮膚の水分量が1時間も増加したことを観察しました。これは、「温熱刺激による皮膚交感神経活動の減少で皮膚血流が増加し角層に水分を補給する」という、身体内部から皮膚角層への水分供給メカニズムが生じたものと解釈しています。しかも、この温熱刺激によ

る水分補給効果は、寒い冬にしか發揮しないこともわかりました。研究はまだ発展途上ですが、今後もヒトが本来持っている力を活用した皮膚の保湿方法の実用化を目指していきます。

最後になりましたが、私の研究は、元愛媛県立医療技術大学臨床検査学科の昆教授や広島大学医歯薬保健学研究院で博士論文作成過程からご指導くださっている松川教授・宮腰教授、およびボランティアとして快く研究に協力してくれた卒業生ならびに在学生の皆さんに支えられて成り立っています。この場を借りて、皆様に心より感謝申し上げます。



<http://img.yaplog.jp/img/02/pc/u/s/a/usako12/0/16.jpg>(2015.7.10)

動紹介

すべての現象は ランダム要素のネットワークで成り立っている

臨床検査学科 助教 佐川輝高

基礎科学出身者なので具体的で一筋な応用科学的研究のテーマはもっていません。それでは、どのようなことに興味を持っているかというと「現象は不安定要素のネットワークから構成されているが、それはどのような仕組みで一見安定な現象であるかのように見えているのか?」ということです。これが研究テーマであるといえると思います。

テーマを追求するためには、生物学的手法を用いることが多いですが、化学的、物理学的、工学的、教育学的、情報科学的、物語分析的手法を用いることもあります。教育に関しても同様のアプローチの仕方をしています。高校の教科書、大学の教科書問わず、日本の教科書では知識が重視される傾向があって、その裏にある現象の不安定要素が記載されずに、行間の間に隠されてしまっています。学生はどうすればこの不安定要素には気付かないまま、大学教育期間を終了してしまう危険をはらんでいます。しかし、全ての現象は不安定要素の上で成り立っているのです。その無数の不安定要素が何らかのバイアスを受け、刹那的・集団的に一方向性に現象が進み、カスケードを形成しています。そして、現象を囲む環境がある程度の安定性を保っている場合、この一方向性は集団として刹那的から一見永劫的であるかのように見えできます。例えば、血液凝固における酵素集

団の一連の反応は一方向性に進んでいるかのように見えますが、実際にはランダムに反応しあうという状況も起こります。そして、そのようなランダムな反応があるから一方向性に進む反応が担保されているという側面があります。そのような複雑な現象の裏に実在する必要不可欠な不安定要素は教科書の行間の間に隠されています。

このようなバイアスとは何であるのか、安定化させた環境はどのようなものであるのか、これらによってどのようなネットワークが構成され、そのネットワークを構成する原理は他のネットワークでも見られることなのかというようなことに興味をもって研究を行なっています。

地域に開かれた大学づくり 地域交流センター事業

地域の皆様や県内の保健医療関係者と交流・連携して、大学が有する教育研究成果を社会に還元します。健康・医療に関するトピックや看護・介護の技術に関する公開講座、親子体験講座、砥部町内のグループや教育機関への出張講座を行います。

平成27年度活動予定(抜粋です。くわしくは大学のホームページをご覧ください)

(専門人材育成)	卒業生と在校生の交流事業「ホームカミングデー」	6月20日(土)
	思春期保健スキルアップ研修会	8月27日(木)、3月未定 2回実施
	看護実践セミナー	10月3日(土)
(一般人材育成)	看護師＆臨床検査技師「お仕事体験」NPO法人とべばっかぽか協力事業	6月28日(日)
	えひめ高校生生体機能研究プログラム－ホメオスタシスの探求－	8月10日(月)・11日(火)発表会:H27/未定
	高校出張講座/メディカルトーク	11月11日(水)
	おもしろ理科教室(学生祭)	10月24(土)・25日(日)学生祭
	地域包括ケアシステムの充実を指向した在宅ケアを担う人材育成(西予市)	9月～3月
	2015ゆめプロジェクト子どものいのちと体を守るお仕事体験－エミフル松前－ NPO法人ラ・ファミリ工協力事業	8月23日(日)
(学人材育成)	リレーフォーライフ2015	10月17日(土)・18日(日)
	学生ボランティアの登録と活用	常時
調査	地域包括ケアシステムにかかる地域ニーズ調査(西予市)	10月～3月実施・分析・報告予定

平成26年度活動の一部を紹介します

子どもたちの夢につながるお仕事体験 (人材育成推進事業)

子ども達が将来の夢や仕事を考える機会を提供する「ラ・ファミリエ子どもの夢プロジェクト2014」にて、本学は看護師、助産師、臨床検査技師のお仕事体験ブースを担当し、学生ボランティアの協力も得て、子ども達とその保護者の方々に血圧測定や血液型の判定などを体験してもらいました。各ブースとも早くから行列ができるなど、大盛況で、延べ509名もの参加がありました。

企画・実施担当(枝川・井上・相原・梶原・坂東)



図書館は成長する有機体

Library is a growing organism

専門員(司書) 泉 浩

「図書館は成長する有機体である」

司書資格取得等で図書館学を学ぶものにとって必ず耳にする言葉です。インドの図書館学の父と呼ばれたランガナタンの『図書館学の五原則』の一つで、社会情勢や利用者ニーズの変化、ニューメディアの登場等により、情報の提供・収集・保存を目的とする図書館は、変化に対応し成長しなければならないという意味で、普遍的な価値を有する至言と言えるでしょう。

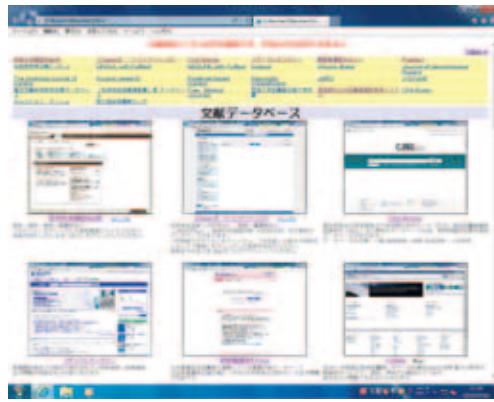
さて、本学の図書館も時代の波に取り残されないよう新しい試みを行なっています。その一部をご紹介します。

1 IT環境の整備

大学院が設置され洋文献へのニーズが高まることにより、新たに洋雑誌の電子ジャーナル6種を導入しました。その結果、導入済み電子リソース(電子ジャーナル・データベース)は、次のとおりになります。

医学中央雑誌 Web 版 (文献検索システム)
J-Dream III (文献検索システム)
最新看護索引 W e b (文献検索システム・電子ジャーナル)
CiNii Articles (文献検索システム・電子ジャーナル)
CINAHL with Fulltext(電子ジャーナル)
MEDLINE with Fulltext(電子ジャーナル)
メディカルオンライン (電子ジャーナル)
SCIENCE(電子ジャーナル)
Chronic Illness(電子ジャーナル) 新
Journal of Gerontological Nursing(電子ジャーナル) 新
The American journal of nursing (電子ジャーナル) 新
Nursing research(電子ジャーナル) 新
Evidence-based nursing(電子ジャーナル) 新
Diagnostic cytopathology (電子ジャーナル) 新

学生・教職員は学内 LAN で電子リソースを利用できます。



<文献検索用PC画面>

貸出用ノート PC 2台を追加導入し、計5台を学内の希望者へ貸し出しています。

個人用 PC やタブレットでもインターネットに接続できるよう、公衆無線LANスポット(Wi-Fiスポット)も設置しました。

図書館HPから貸出状況を確認することもできるようにしました。

2 図書館利用環境の整備

利用しやすい図書館を目指し、館内整備にも力を入れています。

土曜日・平日夜間の図書館利用について、平成27年4月より学外の方も利用できるよう変更しました。この変更により

社会人の方が仕事帰りに利用できるようになりました。

学生から要望のある図書館内での飲み物の利用について、ペットボトル等ふた付きの容器に限り利用できるよう変更しました。利用マナーが悪いと資料保存の観点から再び禁止することもありますので、飲み物の利用についてルールをお守りくださいますよう皆様のご協力をお願いします。

その他、別館に第2書庫を整備し収蔵可能冊数を約3,000冊増加させ、書架の耐震補強工事により図書館内の安全性を高めました。

今後は間仕切り板及びスツールの設置、ラーニングコモンズスペースの設置も検討し、さらに利用しやすい図書館を目指していきます。

3 学生図書館サポーターの結成

学生と図書館との垣根をなくし、図書館運営に学生の声を直接反映させるため学生サポーターを結成しました。

学生サポーターを公募したところ、2・3年生9人が手を上げてくれました。具体的な活動はこれからですが、実績のある愛媛大学図書館センターとの情報交換、例年実施しているブックハンティングの実施から活動をスタートしたところです。今後は学生のみなさんが能動的に活動する予定で、活躍が楽しみです。



<学生図書館サポーター 愛媛大学中央図書館訪問>

【最近の図書館の動き 2014 年秋以降】

「東日本大震災写真展」「メモリアルマンガ展」の開催
リクエストボックスの設置
図書館 HP で「利用状況照会」を開始
新聞折り込みチラシの提供開始
HP の図書館トップページから蔵書検索ができるよう設定
貸出用ノートパソコン 2 台追加配置
電子ジャーナル 6 種追加導入
書架の耐震補強
公衆無線 LAN スポット (Wi-Fi スポット) を設置
「愛媛県立医療技術大学図書館アクションプラン」策定
学外者の平日夜間、土曜日の利用開始
学生図書館サポーター結成
電子ジャーナルの ILL 受付開始
学生図書館サポーター愛媛大学図書館訪問
密封容器の飲み物の利用許可
ブックハンティングの実施

Information

インフォメーション

図書館利用案内《学外の皆さんへ》

休館日	日・祝日 12月26日～1月4日 蔵書点検期間 メンテナンスなど
利用時間	平日／9:00～21:00 土曜日／9:00～17:00(入館の際は、受付まで)
館内閲覧	自由にどうぞ。図書、雑誌、新聞、ビデオなどがあります。
館外貸出	登録の際には身分証明書(現住所が確認できるもの)が必要です。 貸出冊数と期間は、3冊2週間です。
図書返却	図書を返却するときには、「図書貸出券」は不要です。 閉館時には、事務棟入口のブックポストにお返しください。
コピー	館内のコピー機でコピー可能。但し、著作権法で許可された範囲内でのコピーとなります。 コピー代金は有料(1枚10円)小銭を用意してください。
蔵書検索	図書館のホームページをご利用ください。
文献検索	学外の方は、利用前に受付までお越しください。

平成27年度 学年暦

4月	1日～3日 ガイダンス等 3日 入学式 6日～ 前期授業 9日 (午前)健康診断 (午後)新入生オリエンテーリング	5月	1日 交通安全講習会 9日および16日 内科検診	6月	20日 開校記念日 ホームカミングデー	7月	30日～8月5日 前期試験
8月	8日～9月30日 夏季休業日 ※8日～8月31日 助産学専攻科の夏季休業日 8日および9日 第1回オープンキャンパス	9月	5日 助産学専攻科推薦入試(本学枠) 大学院入試	10月	1日～ 後期授業 23日 防火訓練 24日および25日 学園祭・第2回オープンキャンパス	11月	14日 学部 推薦入試 学部 社会人特別選抜入試 15日 助産学専攻科推薦入試(県内枠) 助産学専攻科一般入試
12月	12日 第3回オープンキャンパス 25日～1月3日 冬季休業日	1月	16日 大学院入試 16日～17日 大学入試センター試験	2月	3日～9日 後期試験 25～26日 学部 一般入試(前期日程) 25日 学部 私費外国人留学生特別選抜入試	3月	12日 学部 一般入試(後期日程) 18日 卒業式・修了式 19～31日 春季休業日

広報誌「砥礪(しれい)」についての意味

「砥礪(しれい)」とは、「①砥石(といし)②ときみがくこと」とあり、さらに「学問、修養などを高めようと努力すること【大辞泉:小学館】」などの意味があります。平成16年に大学が開校して1年経った平成17年に、本学の位置する砥部町にちなみとともに、大学広報誌の名称としてふさわしいということで多くの賛同を得て決定しました。

公立大学法人 愛媛県立医療技術大学

〒791-2101 愛媛県伊予郡砥部町高尾田543番地
TEL 089-958-2111 FAX 089-958-2177
ホームページ <http://www.epu.ac.jp/>



[アクセスマップ]

